

見方に立っていた江口現代史には、理論的にはこのような事態も先刻織り込まれていたと言っている。しかしそれだけにまた、このような歴史の大きな転換を目の当たりにする今、わがままなゼミ生としては、先生の生の意見を直接お聞きしたい、という思いがしきりにする。

教師としてただならぬ事——江口先生の思い出

中嶋 嶺雄
(東京外国語大学)

江口朴郎先生のお名前や御著作は、すでに高校生の頃から存じあげていたが、私が最初に江口先生にお会いしたのは、六〇年安保の直後、中ソ論争が激しくなってきた、この問題をめぐる研究会が開かれていた飯田橋の社会主義政治経済研究所においてであった。石堂清倫、井汲卓一、前野良の諸氏が御一緒だったと思うけれど、まだ学生あがり、世界経済研究所(小椋広勝理事長)の新米の所員になったばかりの私にたいし、ダルマ・ストープをはさんで対面された江口先生が大変鄭重に挨拶して下さったことをはっきりと憶えている。

世界経済研究所は、間もなくアジア・アフリカ研究所(岡倉古志郎所長)へと解消することになったが、その過程で、いわゆる代々木との関連での政治的内紛が続いた。

私自身は、この紛争に直接関与したわけではなかったが、それでもそのトラブルの余波は激烈で、たとえば「人民日報」など私以外に誰も読む人がいないのに、私が読めないように重要箇所をあえて切り取ってみたりする、ということさえあった。

そんなこともあって私は憧れて入った世界経済研究所に嫌気が差していたとき、学生運動仲間の親友S君が東大の大学院(国際関係論)を受験するというので一緒に受けたところ、私の方が幸運にも合格した。私がかねて、外語大ロシア科の先輩F氏が東大の国際関係論へ進んでおられたので、江口先生が中心に書かれた国際関係論のテキストも見せていただき、国際関係論という新しい学問分野に強く惹きつけられていたのだが、ことに江口先生の所論はよく読み、しかも前述のようにすでにお目にかかったこともあったので、大学院の指導教官は、当然、江口先生だと思いついていた。というよりは、それまでアカデミックな場で教育されたこともない学生運動あがりの私は、当時の進歩的文化人全盛期の風潮の中で、江口先生以外の教官に関しては、わずかに斉藤孝講師の文章を読んでいただけで、殆ど知らなかったのである。入学直後に江口先生の研究室へ伺って、指導教官のことをお願いすると、意外にも先生は、「うーん」と頭をかかえられ、しばらく考え込まれていた。「専門がねえ……」と口の中でもぐもぐ言っておられた先生は、暫くして、「じゃ、やりましょう」と応じて下さったのである。江口先生は、私が中国を専攻するので、他に専門の指導教官がおられることを念頭に置かれていたのであったと思う。

実は、このことは今回、この場をお借りして初めて告白することであるが、右に述べたような次第で私は大学院に入るまで、たとえば衛藤藩吉先生のお名前さえまったく知らなかった。だから大学院の面接試験のとき、大柄な碩学風の先生が私にいろいろ質問されたので、衛藤先生のお名前から察せられる「支那風」の風貌からして、その先生がたっぷり衛藤先生なのだと思いついて入ったのだが、入学後にそれは植田捷雄教授だったことを知ったのであった。衛藤先生は、その頃、「世界」に鈴江言一論を発表されたただ助教授で、春休み一杯アメリカ留学に行っておられたので、大学院の面接試験には出ておられなかったの

である。衛藤先生は、その後しばしば「中嶋君は僕を指導教官にすることを拒んだ」と冗談交りに言われることがあったが、実情は以上のようなものであり、もう一つ付け加えるなら、衛藤ゼミが開かれていた土曜日は、私が生活を支えるために主宰していた「霞ヶ丘ヴァイオリン教室」のレッスンの日で、できれば避けられたのである。

こうして私は、江口先生の御指導を受けることとなったのだが、まさに講筵に列すると言った感じの江口ゼミで何回か報告した際に先生の御自身の意見を述べられるだけで、私の研究や執筆活動に関しては、まったく自由にさせて下さった。

江口先生の想い出でもっとも忘れがたいのは、私が大学院修士課程在学中の一九六四年秋に処女作『現代中国論——イデオロギーと政治の内的考察——』を青木書店から出版したときのことである。幸いにして、この本は現在でも版を重ねているが、当時は、わが国の学界・論壇を通じて「毛沢東思想」や中国共産党への評価がきわめて高く、中ソ論争に関しても中国側に与する見方が多かった。私の著書は様々な評価を得た反面、批判も多かったが、OBを含めた国際関係論の院生研究会で本書を取りあげてくれ、その合評会が冬のある日、本郷の学士会館で開かれた。同学・先輩の諸氏は、中国専門のA氏、ロシア専門のB氏、東欧専門のCさんと次々に拙著を様々な角度から批判された。私はまさに針の筵に座らされていた思いであったが、院生たちの合評会だと言うのに、なんと江口先生がやや遅れてお出になり、末席に座って、合評会の様子にじっと耳を傾けておられたのである。そして、最後に意見を求められた江口先生は、いつものような訥々たる口調で拙著への感想をきわめて好意的に述べられたあと、かなりはつきりと、「まあ、諸君も早く中嶋君のように本を一冊書くんですねえ」と言われたのであった。

このときの江口先生の教師としてのただならぬお姿を、私は、学生たちに自分が果たしてこんな指導ができるものかと、いつも心の奥に秘めて今日にいたっている。

江口先生を偲んで

藤田 和子
(高知大学)

江口先生にはじめてお目にかかったのは、駒場の教養学科への進学がまった大学二年の秋のことだったと思う。一九六〇年、安保闘争の熱気が構内のそこかしこにまだ漂っている頃だった。

『帝國主義と民族』の著者の講義をはじめてつけ、その独特の話しぶりに、どうやってノートを取ればよいのか途方にくれた日のことは、今でもはっきり思い出すことができる。先生は吃音があつて聞きとりにくいうえ、興がのるほどにテーマが自由自在に飛び移るのだから、全容を理解するのは当時の私にはとうてい不可能であった。それでも、わからないなりに、不思議に心を惹かれたのは、先生がまだ未熟な学生を前に決して講義の水準を落さず、第一線の研究者相手と同じに語りかけてくださったことが、その内に秘めた情熱とともに十分に伝わってきたからであらう。それ以来、学部、大学院を通じて指導教官をお願いし、三〇年間変らずに指導をいただいていた。

江口先生の思い出はつきないが、何ととっても、私がベトナム研究をはじめた頃のことが一番深く印象に残っている。もともと私は文学部志望だったから、もし安保闘争がなければ、入学当初の希望通り仏文へ進学していただろう。ごくあたり前の一人の学生として、一九五九年と六〇年、私はほとんどの集會や

思索する歴史家
江口朴郎

【人と学問】

齊藤 孝ほか◎編

青木書店

思索する

歴史家

江口朴郎

青木書店

亮昇孝興治雄吾宏郎